

講談師

六代目 神田伯山^{さん}

伝統芸能・講談を現代に甦らせ、牽引する六代目神田伯山氏。その語りには、聴衆を引き込み、納得させる力があります。インタビューでは、講談の魅力、説得力ある語りの為の工夫、表現者の矜持などを、笑いを交えて語っていただきました。言葉が人を動かす力について、弁護士業務にも通じる示唆に富む内容となっています。本インタビューの様子は4月18日放送の「問わず語りの神田伯山」でも紹介され、PodcastやSpotifyからもお聴きいただけます。

聞き手・構成：富田 寛之、伊藤 敬史
写真撮影：坂 仁根



——伯山先生が、松之丞から伯山に襲名^{*1}される直前に、初めて講談というものを聞いて非常に感動し、そこから伯山先生そして講談に興味を持つようになりました。本日は、お話を伺えてとても光栄です。よろしくお願い致します。

ありがとうございます。不思議だなと思ったんですよ。弁護士会って、何か遠いなと思って。興味をもって呼んでいただけたら、嬉しいです。

——伯山という名跡は、講談界を代表する非常に重い名跡というのですが、その名跡を継ごうということは、講談界に入られたときからお考えだったんですか。

昔、黒門町本牧亭^{*2}の前座修業をしているときに、過去の名人の「めくり」がそろっていて、その中に「伯山」もあったんですよ。

そのめくりをみただけでやっぱり憧れがあるので、「わあ」というような感じで。二ツ目になって師匠の許可を得て、三ツ鑓という3代目の伯山先生がお使いになっていた紋も使わせて頂きました。別にそれで自分になろうなんてことはみじんもそのとき思っていない

です。紋だけちょっと使わせてもらう。ただ、明確になりたいなと思ったのは、他協会の先生の講談会があったんですけど、楽屋で大先輩たち、60代、70代、80代ぐらいの先輩たちが「伯山なんて名前を継ぐものはいらんですかね、これから」とか言って。「いや、あんな名前を継ぐなんていうのは、何も知らない人が継ぐんでしょね。偉大さを分かってない馬鹿ですね」みたいなことを話していたんです。それを聞いて頭にきましてね。心の底から、何をノスタルジーに浸っているんだと思ったんですよ。無性に怒りを覚えたんです。名跡というのは受け継がれてこそだろうと。その方達は大先輩で好きな人なんですよ。でも、一客目線になったときに、現代よりも過去の事ばかり考えている事に苛立ったんですね。私は講談のコアなファンであると同時に、ちょっと冷めた離れた視点もあるんです。

——講談師の道を選んだのはどういう理由からですか。

単純に好きだからやっているんですよ。講談を単純に好きで、夢中になってやっていたら多少評価され

*1：伯山は、講談界において最も権威ある、著名な名跡。5代目伯山が1976年に死去してから襲名者がいなかったが、真打昇進とともに、松之丞が伯山を襲名した。

*2：講釈場（講談専門の寄席）。2011年に閉場。最後の講釈場と言われる。

たというのが、実際のところなんです。だから、自分が好きで、一生懸命やっているうちに、何かここをよくしよう、あそこをよくしよう、それはもちろん青写真は学生時代からあったんですけど、何か自然と好きという原動力の下やっていたという形で。だから、本当に今でもそうなんですけど、初めてやるネタとか、やっぱりわくわくするし楽しいですよ。お客様と自分が同じ時間を共有してという、何かすごく単純に今でも講談がやっぱり楽しいですね。

—— 講談において、声のトーンとか、話し方とか、意識をされているところがありますか。

高座に上がって低い声で行くと、知らないお客様は怖がるんですよ。だから、落語家さんを見てほしいんですけど、人によっては冒頭10秒いかにも隙のある高い声を出すんですよ。それはなぜかという、ばかだと思わせるんですよ。つまり油断させるんですよ。実は声のトーンってすごく大事でして、入り口で、この人は敵じゃない、むしろ味方なんだなみたいに。隙を見せれば見せるほど、お客様というのは、かわいいなと感じてくださるんですね。それでいて面白くなきゃ駄目なんです。

ところが、伝統的な講談では、時太鼓のドーンドーンという、厳格な音で上がってくる。緊張感があって、これはだから文化が全然違うんですよ。でも、今は客席にお子さんもよくいますし、色々なお客様がいらっしゃる中であって、柔和で、心優しい隙のあるように見せていくみたいなのの方が、お客様を置いていかないかなとは思っていますよね。それはテクニックの基本だと思います。

—— 話における間の取り方とかは何かコツがあるでしょうか。

自分の声を、録音してみると、思っているのと声が違うんですよ。実はそれと同じように間もずれているんですよ。自分が思っている間と、お客様に届いている間というのは、ずれがある。だから主観的じゃなくて、客観的に芸をしないといけないという。ここがとても芸事の難しいところなのかなという。例えば3秒、1、2、3と待っているつもりでも、お客さんから

したらそんなに待ってないわという。この3秒ぐらいのイメージでやると、体感、こっちは10秒ぐらい待たないと、向こうに3秒と伝わらないんじゃないとか、そこら辺のずれが、芸というのは実に面白いなというふうに思います。間もちょっと違うだけで、もう全部崩れるんです。だからすごく繊細で、だから面白いというのはあると思います。それが、カチッとハマるときはもうすごく喜びですね。

—— 先生は、講談においてまくらというんですかね、最初に時代背景とかを分かりやすい言葉で、ご説明されているように感じていますが、何か意識をされていますか。

お客様って、弁護士に対しても実はそうじゃないかなと思うんですけど、無意識のうちに査定するんですよ。この人は面白い人なのか、そうでないのかとか。最後まで聞くに値する人間なのかとか。もうまくらを聞いて、面白くないと思ったらあんまり前のめりで聞かないですよ。面白いと思ったら、この人が面白いと思うものも面白いに違いないと思っていただけるんですよ。だからラジオはまさにまくらなんですよ。あれは世間にまくらを振ってるんですね、いよいよ講談の本編は私が出演する講談会に来てくださいというように感じて。

—— 先生は、弟子が3名いらっしゃるって、彼らに対する教育に当たって意識されていることはありますか。

大事な要みたいなのがたぶんあって、例えば一月に1本ネタを覚えることですね。師匠である私も、ネタを増やしてます。一緒にやっているということは大きいと思いますね。伝統芸能において、読み物を教えていただく。先生方に習いに行く。稽古って1対1なんですよ。時間を取って教えて頂く、それはもう大変な財産です。

師弟を感じるのは、稽古のときが特に強いと思います。一言一句、きっちり覚える。ブレスの場所から、空気感まで。それを前座という4年間きっちり叩き込んで、二ツ目という武者修業期間に入ったら、自分の色を身に付けていく。守破離。気働きをする前座仕事という修業事態も、非常に厳しいです。ただ期間

は決まっているわけで、そこをどう乗り切るかが自分自身問われているわけです。彼らがこれから売れていたりとか、売れなくてもこつこつ一生懸命に講談を読んで、どれくらい講師として自分自身に厳しくなれるかは、ここで決まると思います。あまり追い詰めすぎてもいけないので、何事も程ではあるんですが。ただ芸事は本来、それくらい厳しいものです。

——『^{あぜくらじゅうしろう}畔倉重四郎』*3や『徳川天一坊』*4では、平気で嘘もつくし、人も殺す極悪人が主人公になって、大岡越前という正義の法律家はその裏で存在感を放ちますね。その辺りの講談のストーリーの面白さについて、どのようにお考えですか。

本当に物語として面白いのは、極悪人の『畔倉』とかだと思うんですよ。

ピカレスクで、悪役を泳がせるだけ泳がせる。人を殺して、殺して、もうこれ以上殺せないよというときに、大岡が出てくる。出てくるのが遅いんですよ。

『鬼平犯科帳』って、町娘が悲惨な目にあった後に鬼平がやって来るんですよ。これが『水戸黄門』だと、やられちゃう前に黄門様がやって来る。でも、世の中の現実が『鬼平』じゃないですか。その現実のグロさが『畔倉』には如実にあって、でも最後は勧善懲悪で大岡が出てくる。その間の自由さみたいなのは、エログロというか、ちょっと心に余裕がある時代の文化だと思います。この描き方はとても好きですね。

面白いのが、5日連続で『畔倉』をやってアンケートをとると、お客様が畔倉の視点になっているんですよ。善の大岡じゃなく、悪の人殺しに感情移入している。そういうふうに感情移入させて、最後の最後まで、畔倉は魅力的な悪として裁かれていく。最終的には大岡の魅力もまたすごいので、大岡が裁いていくことになるんですけど、魅力を下げないというか。善も下げないし、悪も下げない。

邪魔だったら殺しまおうという発想も、私みたいな凡人は殺そうと思ったって殺せない。それが普通の

人間だと思うんですけど、殺せるやつだっているよねと。それも人間だよねというのを、余すことなくちゃんと描いているというのが、『畔倉』に感じるところかもしれません。一言で言えば嘘がないんです。

—— 弁護士も刑事弁護などで、そういう人間と向き合うことがあるので、よくわかる気がします。

『^{いかけまつ}鑄掛松』*5という話がありまして、江戸の文化年間の貧富の差がある時代。橋の上に枝豆売りの親子がいて、夏の暑いさかりに5歳の子どもと手を繋ぎ、生まれたばかりの赤ん坊を背負って枝豆を売っている母親。亭主は病で寝たきり。とにかく枝豆は売れない。橋の下には、屋形船で裕福な者たちが芸者や太鼓持ちと、どんちゃん騒ぎをしている。これ、今の世の中とちょっと通ずるものがあります。

そこを通りかかった主人公の松五郎も、おとつつあんの跡を継いで鑄掛屋をしている。これも貧乏な商売。「暑いな、暑いな」、「でもいいんだよ、貧乏だけど、人に喜んでもらえる商売だ」と。ふっと橋の下を見た時に、どんちゃん騒ぎ。橋の上では枝豆売りの小僧たちが泣いている。あまりの暑さの両国橋。草履も買ってもらえずに泣き叫ぶ5歳の子供。

「あれも人なら。これも人か」その時に「もう俺は細く長く生きるより、太く短く生きよう」といって、鑄掛けの道具をバンッと川に投げ捨てる。その後、盗っ人になる。

「こんなに一生懸命生きていて、何でこんなに違うのか。どんなに努力してもどうにもならない」という。それを客席に感情移入させて、鑄掛けの道具を投げたときに、すごいカタルシスというか、盗っ人になってもしょうがないよという客目線になる。

でも、その松五郎も、最後は捕まって、首をはねられる。そういう哀れな末路にするけれども、途中まで応援しているんですよ。

講談って、勧善懲悪と言われがちで、そういう話も確かに多いんですが、それでくれないぐらいに、悪

*3：講談の連続物の演目。大岡政談のひとつ。殺人を繰り返す畔倉重四郎と冤罪被害者の息子の城富、大岡越前を中心として話が展開する。

*4：天一坊事件を題材とした講談の連続物の演目。大岡政談のひとつ。

*5：『文化白浪』という盗賊を主人公とする連続物の中のひとつ。

役の魅力を存分に引き出し、こいつらの言うことも分かる、だけど最後は…という描き方もする。不思議なジャンルだなと思います。

——今はコンプライアンスの厳しい時代だと思いますが、その難しさを感じることはありますか。

放送禁止用語とかは、今は時代もあって取り締まられていますけど、その話の時代にはないですからね。例えば、今は「目の不自由な」と言わなきゃいけないところを、江戸時代は「めくら」と言ったりした。

目が不自由な人の物語は、落語にも、目が開くようになった話とか、盲人が活躍する話があります。でも、白杖を持った人がいると、周りが配慮して、そういう話を避けたりします。

私の会に来てくれるお客様には、盲導犬を連れて来ている方もいるんですね。そうすると、本当はそういう話をやってほしいらしいんですよ。むしろ、そういう人ほど、この物語は届くのに、何かよく分からない配慮でしゃべりにくくなって、これは誰への配慮なんだというのはありますね。

だから、今は世の中的にいろいろ言っちゃいけない、言っちゃいけないというのはあるんですけど、でも言わないからなくなるものでもないでしょう。そういう意味でいうと、古典芸能というのは、一番自由にお客様に伝えられる。古典こそが嘘のない表現だと思います。

今、良くも悪くもみんなが快適になるようにということでコンプライアンスがあって、それも大事なことではあるんですが、その上で、でもここは譲れないというポイントもあるなと感じます。

——司法に対しての印象はありますか。

正直、今の司法と国民感情が合っていない判決が多いように感じます。誰が納得しているんだろうと。裁判員制度を設けて、そこで重い判決が出ても二審で戻されてしまう。色々な不満は司法にたまっているような気がします。丁寧な社会への説明がもっと欲しいところです。

身近なところですと裁判傍聴は、学生の頃によく行



「大岡越前守忠相 屋敷跡」の案内板（弁護士会館前）にて

っていたんですよ。「裁判傍聴おじさん」っているじゃないですか。友達と社会勉強として裁判傍聴に行ったときに、そのおじさんが、「こっちはあんまり面白くねえから、こっち来た方がいいよ」とか、「これ、たぶん懲役5年行くな」とか言われて。実際に懲役5年だったときに、どうだみたいな顔して。何だよ、お前の手柄じゃないだろうと（笑）。

そこで、人間が如実に出ていて、別の事件でも万引をどうしてもやめられない人とか、いろいろな人生模様みたいなのが透けて見えるように感じました。

——こういう弁護士がいて欲しいというイメージがございましたら教えていただけますか。

私は誰かに頼むとき、専門的な実績がある人に対して、とても信頼を寄せるだろうと思います。裁判の事案によって誰に頼むかは変わると思います。

また、お医者さんも、毎日のように手術していたら、感情が邪魔になってきたりするかもしれませんが、あまり機械的に処理されても、一例一例が俺の人生だぞというのもあると思うので、そういう感情面での配慮がある人は頼みやすいかなとは思っています。得意な分野とそうでない分野、弁護士さんの専門性は特に大事だとは思っています。

プロフィール かんだ・はくざん

1983年生。東京都出身。武蔵大学卒業。2007年、三代目神田松鯉に入門し、「松之丞」を名乗る。2012年6月に二ツ目昇進、2020年2月、真打昇進と同時に、六代目神田伯山を襲名。最もチケットの取れない講師として、講談普及の先頭を直走る。日本講談協会、落語芸術協会所属。2018年11月「第35回浅草芸能大賞」新人賞、2020年6月「第57回ギャラクシー賞」フロンティア賞、2023年3月「令和4年度花形演芸大賞」大賞受賞。